

スタジオ夜話

第51話 スタジオ夜話（番外編）

サウンドドラマの制作

（音声調整卓）Ⅰ 概要

☆ はじめに

梅雨の季節なのですが雨が降ったり降らなかつたり、そうこうしているうちに沖縄では梅雨明けとなってしまいました。また暑い夏がやって来ます。読者皆様も熱中症などお気を付けください。さてスタジオ夜話番外編サウンドドラマ制作今回から制作ツールの要、音声調整卓について考えてみたいと思います。機能的なことはその基本となりますが制作過程での使い勝手を中心にお話しを進めて行きます。今回はその第1回です。今更的なお話しになるかと思いますがお付き合いよろしくお願いたします。

☆ 音声調整卓って何？

今更ですが音声調整卓とはいったい・・・録音収録機材？その使用上の目的を理解すると音声を扱う上でかなりオールマイティな使われ方をする機材であるとわかります。そこでまず作業目的を検討してみましょう。音声調整卓で行う作業は現在様々です。録音はもとより編集加工、コンサートなどでのPA、テーマパークなどのアトラクション等音声提供とその役割も多種多用途です。しかしその機材（音声調整卓）の原点はブロードキャスティングコンソールという放送業務を主たる目的に作られた音声調整卓です。歴史的にみれば音声調整卓の最も古いものでは単一チャンネルの音量調整のみで送信機の過入力を防ぐ目的のものです。正に調整卓なのです。機器はそこそこの大きさを専用台に置かれていたことが

ら卓（コンソール）と呼ばれたと想像できます。その後複数チャンネルの調整を行うことができるものが登場します。ミキシングコンソールの誕生です。調整卓でミキシングを行うという作業の原点もここにあります。エンジニアは送信機への過入力を防ぐためマイクロフォンの音声信号を調整していたのです。一本のマイクロフォンの音量調整です。マイクロフォンに入力される音の大小の調整は音を出す人にゆだねられていました。大きな声で話すときは若干OFFで、あるいは大きな声っぽく小さめの声でといったテクニックでカバーしていました。音楽の演奏ではお互いの音の大きさや楽器配置を工夫して放送していました。エンジニアはその際出演者に的確なアドバイスをする事により不自然な調整をすることなく放送を行っていたのです。ミキシングテクニックの原点、音声調整卓の多チャンネル化や様々な機能はこうした積み重ねのハウツーの歴史的結果です。調整卓とエンジニアによって、現在のマルチマイクロフォンとミキシングとはまた違ったアンサンブルがそこには存在していたのです。

☆ 録音が出来ようになったこと

生放送が当たり前だった当時、録音が可能になったことで大きく世界が変わります。基本的な調整卓での作業は送信機の過入力防止と同様に録音機への過入力防止であることに違いはないのですが実は調整卓の機能的なことがここで大きく変化します。マイクロフォンの複数化は既にこの時存在していました。録音機の出現は収録した音とマイクロフォンの音をミキシングしてさら

にそれを録音して使うことが可能となったことです。（SN比の問題で数は重ねられないという問題はある。）ここで初めて録音することとその後あらためて音声を調整して放送素材とすることミキシングテクニックの進化です。マイクロフォンと録音されている素材との融合が大切になってきたのです。音声調整卓にも放送用の出力回路や録音機への入出力回路が付加されました。また複数台の録音機も使えるようになってきます。音声調整卓は放送業務から録音業務でも必要不可欠な機材と進化してゆくのですね。現在のレコーディングコンソールは当時の音声調整卓と同様、録音を主な作業の中心に置いた音声調整卓です。世の中に録音という技術が普及しその誕生を見るのですが今のように進化するにはまだかなりの時間必要でした。マルチトラックレコーディングが可能になった時がそのきっかけとなりますがその間かなりの歳月が必要でした。

☆ PAの世界はどうなっているの？

古くは大観衆の前で演説する行事などでマイクロフォンと同時期にその音を大きく増幅して流すという技術はありました。これがPAの始まりと言えそうです。しかし今日の意味とは少し違う気もします。アメリカのジャズクラブなどでビッグバンドをバックに歌をうたう、声がバンドの音量に負けないようにバランス良く拡声する電気楽器が大音量となりドラムセットの音はその音量に負けるようになってドラムセットの音をPAする。こんな感じがPAの始まりではないかと思えます。両者にはあきらかに時代の差がありますがスタジオ夜

話的にはこの両者がPAの原点であると考えています。ジャズボーカルのPAはその後レコーディングとの関係性を重要として発展して行きます。一方電気楽器とドラムセットとしてのPAは電気楽器どうし、あるいはボーカルを含めてアコースティックな楽器なども含めたコンサートPAという歴史をたどります。放送業務にしても公開録音などPA需要が多くなりました。PAコンソールと呼ばれる音声調整卓は独自にこうしたニーズに答え発展して行きます。

またその機能は他の音声調整卓とは大きく違ったものも有してもいます。

☆ **音声調整卓その機能が変わった。**

アナログからデジタルに音声の世界が変わりました。それにあわせて音声調整卓の様相が一変します。前にお話したように音声調整卓はその使用目的にあわせて進化してきましたがアナログ時代からデジタルの時代を迎えて目的別の専用調整卓から自由にその機能をレイアウト出来るようになりました。例えば調整用のツマミひとつでも様々な目的に使いまわせることができます。調整卓の入出力も自由に構成できます夢のような進化です。ここで音声調整卓は音声信号を直接あつかうのではなく正に調整機能だけを担うコントローラーとなったのです。現在でもアナログ音声調整卓は開発されてもいます。またかなりの高性能機種でありその存在感は大きなものです。しかしアナログ、デジタルの賛否は別の次元のお話となっています。それは音声調整卓の調整機能はアナログの音声信号を扱う調整卓でもコントロール機能などはデジタ



空梅雨の空模様 (も)

ル化されているからです。通称アナログデジコンと呼ばれる調整卓です。デジタルの進化した調整卓機能のメリットを生かしたものです。また編集加工に特化するとPCとの連携でDAW上のミキシング機能と同期して動かすことができるコントローラータイプの調整卓も開発されました。アナログ、デジタルにかかわらず今日音声調整卓はその使用目的にあわせて自由に機能レイアウトができる時代になったといえます。

☆ **昔から変わらないものもある？**

自由な構成で高性能な音声調整卓が次々と発表される中、今も昔も変わらないところもあります。代表的なものに、例えばHAヘッドアンプセクションが挙げられます。自由な構成で高性能な音声調整卓が次々と発表される中、今も昔も変わらないところもあります。代表的なものに、例えばHAヘッドアンプセクションが挙げられます。自由な構成で高性能な音声調整卓が次々と発表される中、今も昔も変わらないところもあります。代表的なものに、例えばHAヘッドアンプセクションが挙げられます。

ます。もちろんGUIの進歩によってPC上でのコントロール(マウスなど)も可能ですがデジタルコントロール信号で制御しているもののフェーダーや各種コントロール用のポテンションメーター類はアナログのままです。監視用メーター類もLEDが大半を占めていますがアナログメーターも捨てがたい存在です。どうも人間というアナログチックな存在とかかわる機器にはそうした部分も大切なのか考えさせられます。

☆ **次回は**

今回は音声調整卓(概要)として読者皆様、諸先輩の方々には今更というお話しにつきあわせてしまいました。次回からはスタジオ夜話番外編らしく音声調整卓を様々な視点?から取り上げサウンドドラマ制作に於けるその在り方、使い方について細かくお話してゆきます。意外な機能が付属していると便利とか、デジタル卓も工夫次第で想像外の使い方があります。サウンドドラマ制作は創意工夫が重要!次回をお楽しみに。

— 森田 雅行 —